

# ゼミナール

## 環境

表。一連の報告書をCCと同様の手法で各もって、第5次評価以降7〜8年の各分野にわたる新知見の集大成となる。現在はその過渡期だが、先頃閉幕した国連気候変動枠組み条約(UNFCCC)第26回締約国会議(COP26)に向けて関連機関から発信された情報に、WG1が対象とする気候科学の新知見が見られる。

【新しい気候評価】まず注目されるのは、国際エネルギー機関(IEA)が毎年10月に発表する世界エネルギー展望である。2021年版では政策前に、来年10月にかけて提の異なる4種のシナリオが分析され、IPCCと同様の手法で各シナリオの温度水準(19世紀後半からの世界平均気温の上昇量)が示された。各国の政策目標が全て期限内に達成されるシナリオで2・1度、50年に世界全体でCO<sub>2</sub>排出ネットゼロが達成されるシナリオで1・5度、と違った結果である。IEAはCOP26会期中も各国の更新された削減目標を考慮した試算を発表した。

【残余カーボンバジレットの表出】新知見を含む文書と加し、研究コミュニティの一員として活動しているところである。NDCC統合報告における排出・温度の関係は古いままだが、新見として残余カーボンバジレットの評価値が盛り込まれた。これは目標とする温度水準に整合的な現時点からの累積CO<sub>2</sub>排出量の上限を意味する。報告では、最新のNDCCで見込まれる30年までの排出で、1・5度と2度に対応する残余カーボンバジレットのそれぞれ89%と39%を消費する見通しが表示された。

【研究分野間の共創】このような最新知見の迅速な波及には、WG1とWG3の分野での共創的な研究が背景にある。最近の取り組みで、公的な性格を帯びる。20年にパリ協定の運用が開始され、各国の新たな30年目標を積み上げた数値が焦点となる。

# 目標評価を新計算法で

## 統合報告書に指標反映

2021年版では政策前に、来年10月にかけて提の異なる4種のシナリオが分析され、IPCCと同様の手法で各シナリオの温度水準(19世紀後半からの世界平均気温の上昇量)が示された。各国の政策目標が全て期限内に達成されるシナリオで2・1度、50年に世界全体でCO<sub>2</sub>排出ネットゼロが達成されるシナリオで1・5度、と違った結果である。IEAはCOP26会期中も各国の更新された削減目標を考慮した試算を発表した。

【研究分野間の共創】このような最新知見の迅速な波及には、WG1とWG3の分野での共創的な研究が背景にある。最近の取り組みで、公的な性格を帯びる。20年にパリ協定の運用が開始され、各国の新たな30年目標を積み上げた数値が焦点となる。

表 IPCC第6次評価報告書と関連情報の発表時期

IPCC WG1(科学基盤)	2021年8月
IEA 世界エネルギー展望2021	2021年10月13日
UNFCCC NDC統合報告(最終版)	2021年10月25日*
UNEP 排出ギャップ報告2021	2021年10月26日
IPCC WG2(影響・適応・脆弱性)	2022年2月
IPCC WG3(緩和策)	2022年3月
IPCC 統合報告書	2022年10月

\*UNFCCCではNDCの更新を随時受け付けており、COP26会期中の2021年11月4日にNDC統合報告の更新を発表した。

【研究分野間の共創】このような最新知見の迅速な波及には、WG1とWG3の分野での共創的な研究が背景にある。最近の取り組みで、公的な性格を帯びる。20年にパリ協定の運用が開始され、各国の新たな30年目標を積み上げた数値が焦点となる。



筒井 純一

電力中央研究所  
サステナブルシステム研究本部 研究参事

つつい・じゅんいち  
1991年度入所、専門は気候科学、博士(環境学)